

## 史料紹介と研究

## 都城島津邸所蔵「琉球并諸島図」について

黒嶋 敏

はじめに

ここに紹介する都城島津邸所蔵「琉球并諸島図」(図1および図5、以下、都城図と略記)は、二〇二二年に宮崎県の指定文化財となった都城島津家史料の一つである。縦七八・〇センチ、横五一七・九センチにおよぶ横長の大形絵図で、トカラ列島の口之島から与那国島までの琉球の島々を描いている。これまでも沖縄県による歴史の道調査事業のなかで一九八八年に調査がなされ、これを受けて『琉球国絵図史料集 第三集』(沖縄県教育委員会編一九九四)でもカラーで全図版を掲載しているように、琉球史研究においては知名度の高い絵図といえよう。

ただ、図中に具体的な製作年代を示す情報が無く、しかも関係する文献史料を欠いているため、絵図自体の製作経緯や史料的な性格は判然としなない。これには、従来の都城図に関する言説のなかで、一六四九年に江戸幕府に提出された正保の琉球国絵図(以下、正保図と略記)との比較検討が先行してきたことも影響している。幕府に提出された正保図の原本は現在、所在不明になっているが、東京大学史料編纂所に所蔵される島津家文書のなかに精巧な写しが残り、これを利用して研究が進められてきた(「黒嶋二〇二三b」)。この正保図と都城図とは、記載文字の内容は似通うものの、描かれた島の図形は大きく異なり、埋めがたい懸隔が存在するためである。

そこに、都城図の史料的な性格を考えるうえで大きな手がかりとなる絵図が登場した。それは、筆者および安里進氏の研究で明らかになった、個人所蔵の寛永の琉球国絵図(以下、寛永図と略記)である(「黒嶋・安里二〇二〇」)。「同二〇二二」。描かれた島の図形では都城図と共通項が多いのは正保

図ではなく寛永図であり、正保図ではなく寛永図との比較検討を進めることで、都城図が法量に見合うだけの豊かな歴史情報を有していることも浮かび上がってくるのである。

そこで本稿では、これまで筆者が都城図について間接的に指摘してきた論点を再整理するとともに、文献史料から若干の知見を加え、都城図の成立事情や史料的性格について現在の見通しを述べてみたい。

## 一 諸島図系絵図のなかの都城図

都城図の記載文字は、各島についての島名・石高、島内では間切(琉球の広域行政区画)・村の名称、岬などの名称に及ぶほか、朱線で航路・陸路を引き、里程や港湾の情報などを記入する。これらを絵図中に書き込む特徴は国絵図に類似しており、絵図上の空いているスペースに枠線を引き、そのなかに石高の合計をまとめている部分も、国絵図の罫紙に相当するといえる。

記載文字から景観年代を絞り込むと、都城図における琉球国内の石高は寛永の盛増と呼ばれる修正後のものが記されており、すなわち一六三五年以降の数字である。一方で、間切には沖縄本島の本部間切(一六六六年新設)や恩納間切・小禄間切(一六七三年新設)などの新設された間切が見られない。以上から都城図の景観年代は、一六三五〜六六年の間となる。また、沖縄本島の那覇では一八世紀以降に埋め立てが進み大きく地形が変わっていくが、都城図では那覇周辺を海が取り巻く浮島として描いており、これも景観年代を補助する傍証となる。

記載文字は総計七六三件あり、漢字・カタカナ混じりの表記である。すべて同一の筆跡と思われるが、それらのなかには「仲寺」(正しくは沖寺)や「アヤサ森」(正しくは屋良座森)などの誤記があり、製作者が琉球の地理に疎かったことがうかがえる。また彩色は全般に簡略で、塗りのはみ出しやムラも見られることから、既存絵図の写しであると考えられる。丁寧さを欠いた描画・彩色の微証から推測されるところでは、骨董的な関心というよりは実用的な意図で転写された可能性が高く、実用的な観点からすれば、製作年

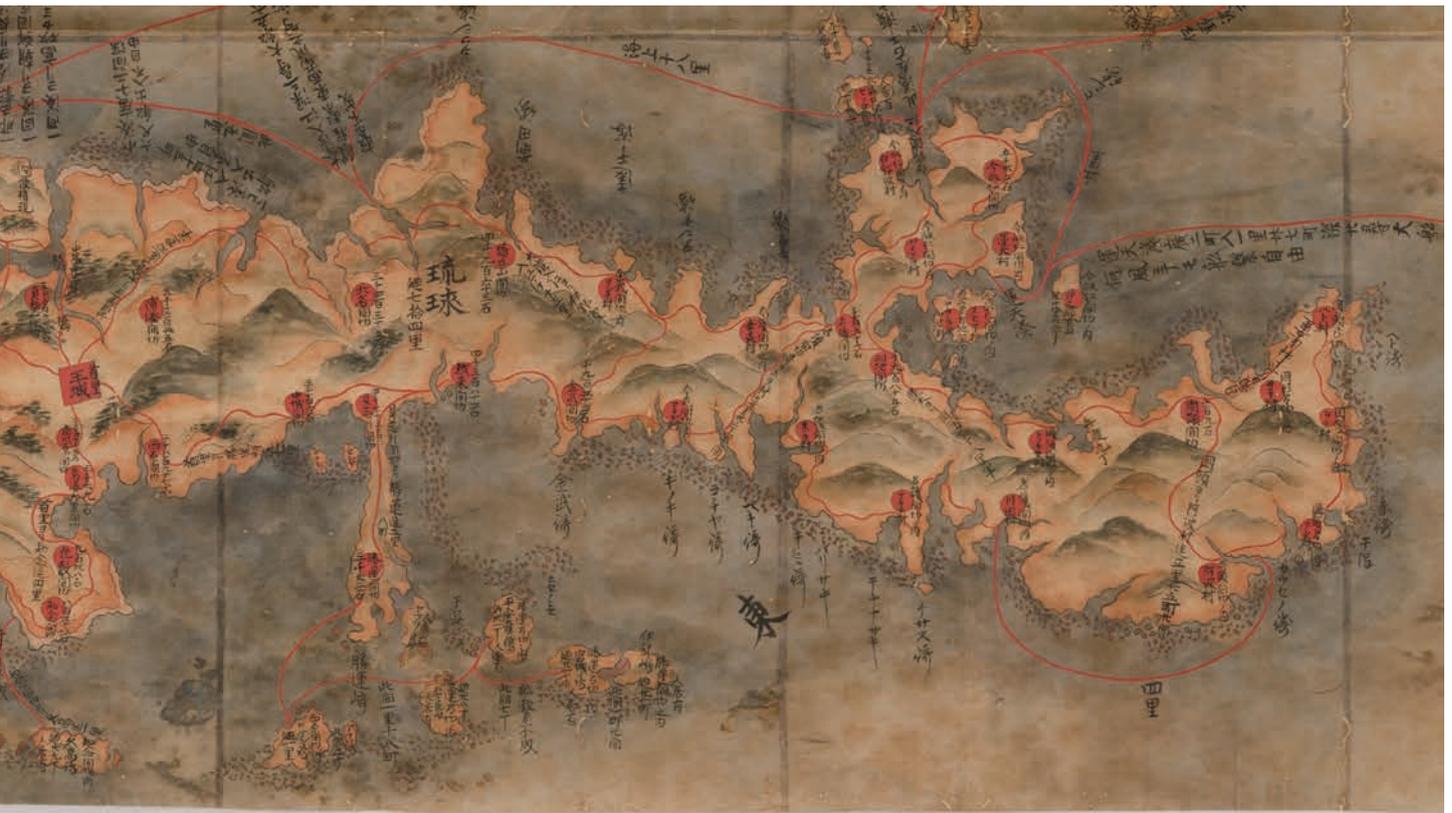


図2 沖縄本島部分の比較

上) 寛永図 (個人蔵、部分、[黒嶋・安里 2020] より)、下) 正保図 (東京大学史料編纂所蔵、部分)

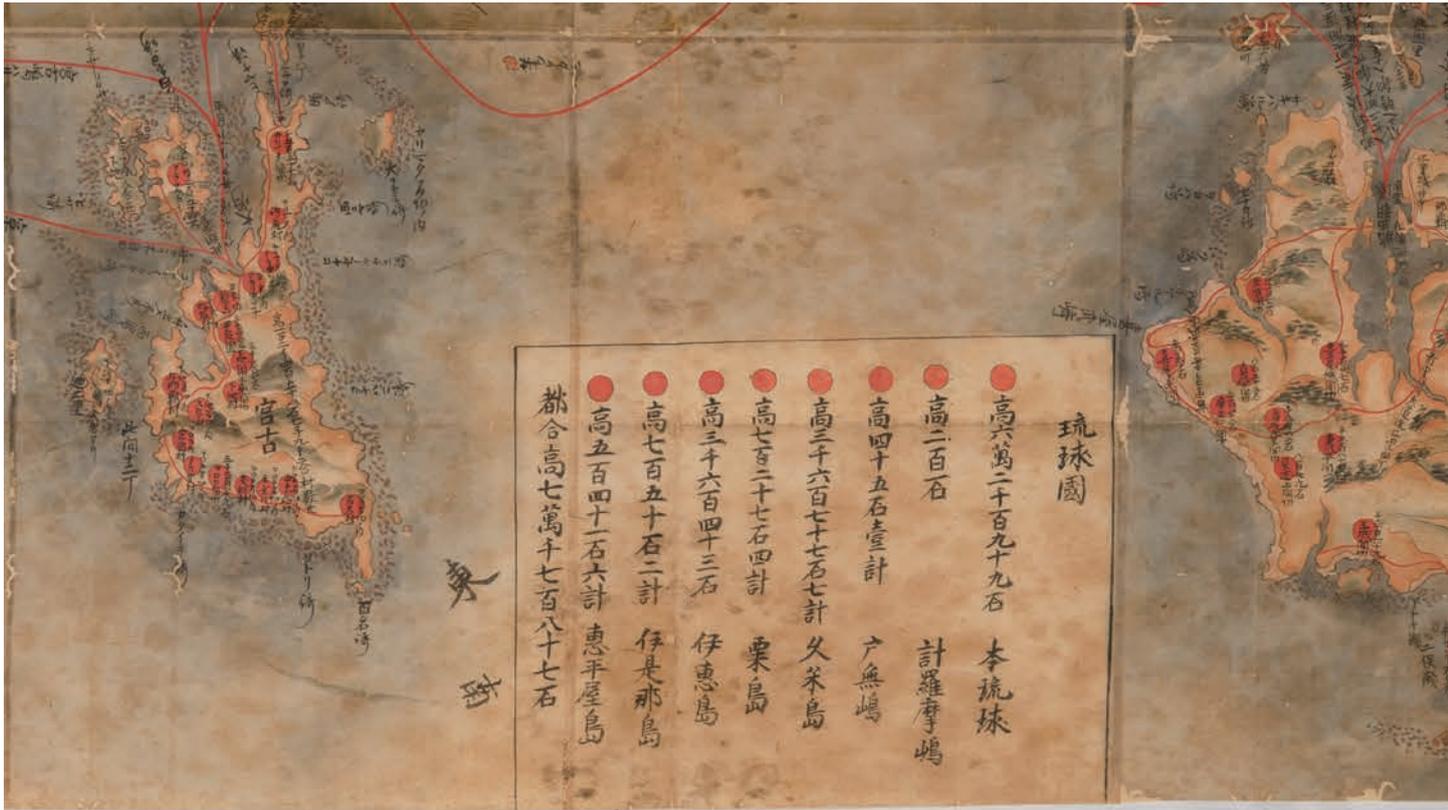


図1 都城図（都城島津邸所蔵、部分、沖縄本島～宮古島周辺）



図3 那覇港部分の比較  
右) 寛永図（個人蔵、部分、[黒嶋・安里 2020] より）、左) 都城図（部分）

表1 諸島図系一覧

絵図名	所蔵者	法量	体裁	描画範囲	那覇	村形	沖縄本島	新設間切	図版掲載物	備考
琉球并諸島図	都城島津邸	77×514	折りたたみ	トカラ～与那国	浮島	丸形	本琉球	無	[沖縄県教委1994]	石高併記。図1
琉球諸島図	東京大学史料編纂所	45.0×345.8	卷子	トカラ～与那国	浮島	丸形	本琉球	有	(史料編纂所に模写)	石高併記、内務省旧蔵図の模写。図4
薩琉海路図	鹿児島県立図書館	38×289	卷子	トカラ～与那国	浮島	丸形	本琉球	有	[平岡2001] p28～29	石高併記。
(鹿児島琉球航路の図)	東風平安助所蔵	不明	不明	不明	浮島	丸形	本琉球	有	[横山1914] 口絵	部分のみ口絵掲載。東風平親方所持品と伝承。現在は所在不明。
琉球明細総図	沖縄県立博物館	53.3×177.2	折りたたみ	トカラ～与那国	浮島	小判形	本琉球	有	[沖縄県教委1994]	石高併記、図中に羅針盤(4方位)
琉球明細総図	国立公文書館内閣文庫	51×217	折りたたみ	トカラ～与那国	浮島	小判形	本琉球	有		外題「琉球諸嶋図」、石高併記、図中に羅針盤(16方位)。

- ・法量の単位はセンチメートル。ただし、沖縄県立博物館所蔵「琉球明細総図」の法量は検討を要す。
- ・国立公文書館内閣文庫所蔵「琉球明細総図」は外務省画図掛旧蔵。
- ・表の「沖縄本島」欄には絵図中の呼称を記した。

代も景観年代に引き付けて理解できるだろう。

また都城図は、いわゆる孤本ではなく、同じ構図をもつ類例の絵図が存在している。このような横長の構図にトカラ列島から与那国島までを納めて描く絵図で管見に入ったものを、表1としてまとめた。いずれも那覇を浮島として描くなど各島の形状が近似しており、余白部分で罫紙のように石高の合計を記すなど、絵図の特徴的な表記方法に重なる部分が多いことから、表1の絵図を仮に諸島図系の絵図と呼ぶことにする。おそらく諸島図系絵図のルーツは共通しており、その所在は不明であるが、転写や縮小を経ながら派生していったものが表1の各絵図だと考えられる。それらの伝来先からは、薩摩藩内や琉球国内に流布していった様子も浮かび上がってこよう。とりわけ注目されるのは、東京大学史料編纂所所蔵の模写「琉球諸島図」である(図4)。この絵図は内務省所蔵絵図の模写であり、内務省には首里城などに収納されていた大量の王府関係史料が琉球処分後に運び込まれていたことから、本絵図の原本もその一つであったと推測される。また、表1にある東風平安助所蔵図も、現在は所在不明となっているが、東風平家は三司官を務めたこともある近世琉球の有力氏族であった。こうした諸島図系の伝来状況をもとに、琉球処分や沖縄戦などの後に当該地域を襲った社会混乱を合わせて考えれば、近世の琉球王府や有力者のもとには、さらに多くの類似絵図が伝来していたであろうことを推測できる。

また、都城図以外では前述の新設間切を記していることから、簡便に通覧できる実用的なベスマップとして重宝され、転写の都度、情報を更新していったのではないだろうか。転写時に情報を更新しやすい記載文字に対し、島の形状はもとの形状を止めやすい。だが転写を繰り返せば歪みは蓄積し、図幅縮小などの操作が加わると、さらに歪みの度合いも大きくなる。諸島図系のなかで最大の法量を持つ都城図は、既述のような描画・色彩における多少の粗さは認められるものの、縮尺の度合いは小さいものと推測でき、記載された文字情報も一六三五～六六年の景観年代を示している。現在判明している諸島図系絵図のなかで、都城図が最も古態を残すものといえるだろう。

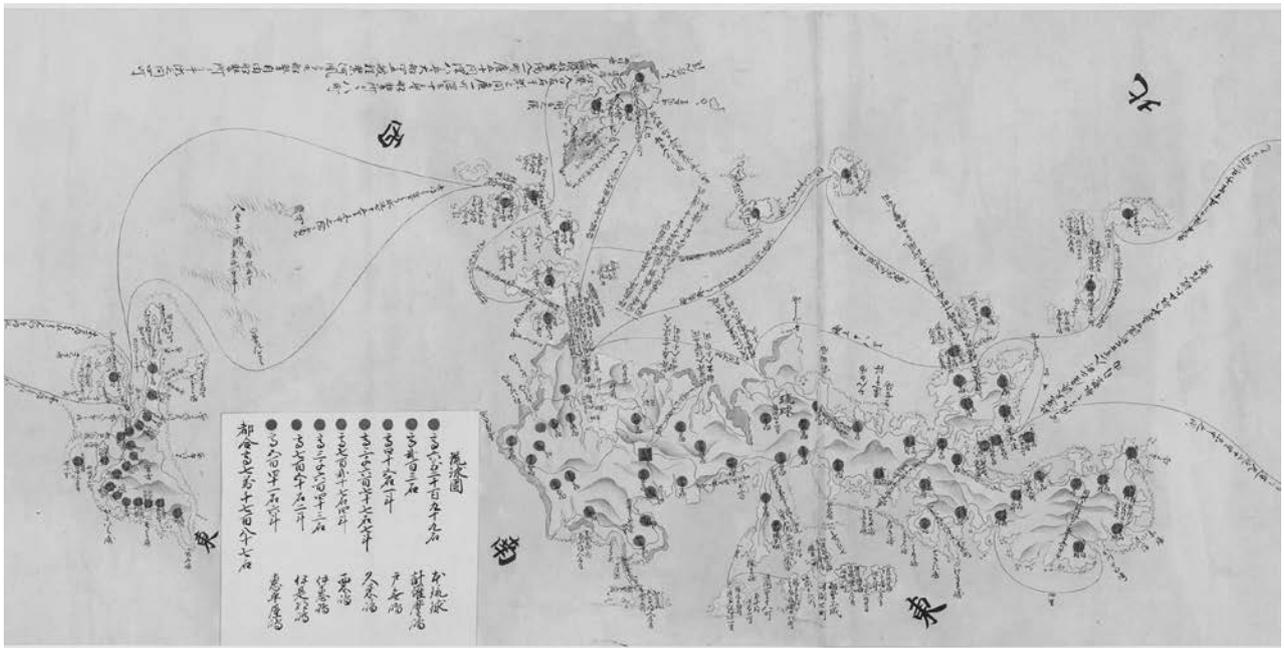


図4 「琉球諸島図」(東京大学史料編纂所蔵、[模写-波-185]、部分、沖縄本島～宮古島周辺)

## 二 都城図は国絵図と言えるのか

次に、都城図と国絵図との関係性を検討していきたい。都城図における石高・間切・村や航路・陸路などの表記方法は、たしかに国絵図を連想させる。そこで、時期の近い寛永図・正保図と比較しながら、その相異点を検討してみよう。

都城図の記載文字は、ひらがな・カタカナの違いはあるものの、内容は基本的に正保図に類似する(「黒嶋・安里二〇二〇」)。石高や間切名のほか、港湾の説明など長文の内容もほぼ一致しており、どちらかが他方を参照していた可能性もある。

だが本来、国絵図は江戸幕府への提出を目的に製作された絵図であり、そこに記された地名・石高は、原則として將軍から発給される領知宛行状と一致していなければならない。その際に問題となるのが絵図における沖縄本島の表記であり、寛永図・正保図に記されている「悪鬼納嶋」が、一七世紀の江戸幕府と薩摩藩主島津氏との公的関係における沖縄本島の正式な呼称であった。<sup>(6)</sup>しかし都城図では、沖縄本島に「琉球」と記し、畠紙部分では幕府・薩摩藩の公的関係において本来は用いない「本琉球」としている。幕藩制における封建的な主従関係のなかでの島名呼称に準拠していない都城図は、幕府への提出を念頭に置いた公的な絵図やその写しであるとは見做しがたい。ほかにも、村型(正保図は楕円、都城図は丸型)、一里塚(正保図は黒丸、都城図は記載なし)などで、都城図は正保図製作時の幕府通達から逸脱している点が随所にある。以上のように都城図は、たしかに国絵図の表現方法に類似するものの、幕府に提出する絵図ではなく、あくまでも薩摩藩や琉球王国内での使用に力点を置いていた絵図となるだろう。

また、記載文字が似通う正保図との間にも、描画の面では相当の懸隔があることに気づく(図1および図2下)。まず構図から見ると、正保図では薩摩国絵図に組み込んでいるトカラ列島を、都城図は琉球と一つの絵図にまとめる点は大きく異なる。さらには、描かれた島の形や海岸線も、両者は相違



している。とくに都城図では那覇を浮島として描いているように(図3)、正保図とは地形が異なることから、「どうも別系統の絵図として作成されたのではないかと思われる」とする指摘がこれまでも見られた(「沖縄県教育委員会一九九四」六七頁、津波清氏執筆)。近年、安里進氏は、都城図と正保図それぞれの島の形を重ね合わせることで精緻な比較を行い、「諸島図系と「正保図」における図形の違いは一目瞭然で、沖縄島については「断絶」と呼べるほどの違いがある。この断絶は、「正保図」が実際の沖縄島の図形に近いことを考えると、新たな測量データにもとづいて沖縄島の絵図が作製されたことを意味している」とする(「黒嶋・安里二〇二二」一九頁)。別稿(「黒嶋二〇二三b」)でも述べたように、正保図の製作にあたっては絵図元になった薩摩藩から絵師や測量の技術者が現地に

派遣されており、彼らが新規に測量を行った結果であると考えられる。沿岸の岩まで詳細に描く正保図と、全般的に簡略で単調な海岸線になる都城図との間に、直接的な継承関係を見出せない。

正保図に比べると、多くの共通項を持つのが、同様にトカラ列島までを含む構図で描く寛永図である。双方の島の形を重ね合わせた安里氏は、都城図における「奄美大島、徳之島、石垣島の図形は「寛永図」との一致度が比較的高い」と評価している(「黒嶋・安里二〇二二」一九頁)。残る沖縄本島については後述するが、それ以外の島の形状は「一致度が高い」寛永図との比較が、都城図の検討では大きな手がかりになってこよう。

都城図と寛永図の近似性は、両図の法量から指摘しうる。寛永図はトカラ列島から与那国島までを三鋪に分け、トカラ・奄美諸島部分が縦七三×横二七九・五、沖縄本島部分が縦一一〇×横一三八・五、宮古・八重山諸島部分が縦七三×横二二三〇・五となる(いずれも単位はセンチメートル)。一方の都城図の法量は全一鋪で縦七八×横五一七・九センチとなり、縦幅は寛永図のトカラ・奄美諸島部分と宮古・八重山諸島部分に近い。都城図の横幅は寛永図三鋪の合計六四八・五センチとは開きがあるが、これは都城図が島と島との間隔を詰めて描いたための差であろう(図5)。とくに沖縄本島西部にある慶良間諸島・久米島の間隔は狭く窮屈な印象を与えるが、当該部分は寛永図だと縦の図幅が一〇センチあり、これを無理に七〇センチ程度に納めるために海上距離を犠牲にした結果ではないだろうか(「黒嶋・安里二〇二二」)。さらには都城図が一鋪の絵図であるにもかかわらず、トカラ・奄美諸島、沖縄本島、宮古・八重山諸島に相応するように三カ所に罫紙を設定し、沖縄本島と宮古・八重山諸島のそれぞれに東西南北の方角を記すのも、もとは三鋪の絵図を編集して一鋪に仕立て直した痕跡だと考えられる。

これらの類似する要素に注意すると、都城図のルーツとなる三鋪分割の絵図と寛永図のルーツとなる絵図とは、共通していた可能性が高い。両図の祖先ともいべき共通する絵図を、仮に「祖寛永図」と呼ぶことにしたい。ただし、「祖寛永図」から都城図に至るためには、三鋪を一鋪に仕立て直し、

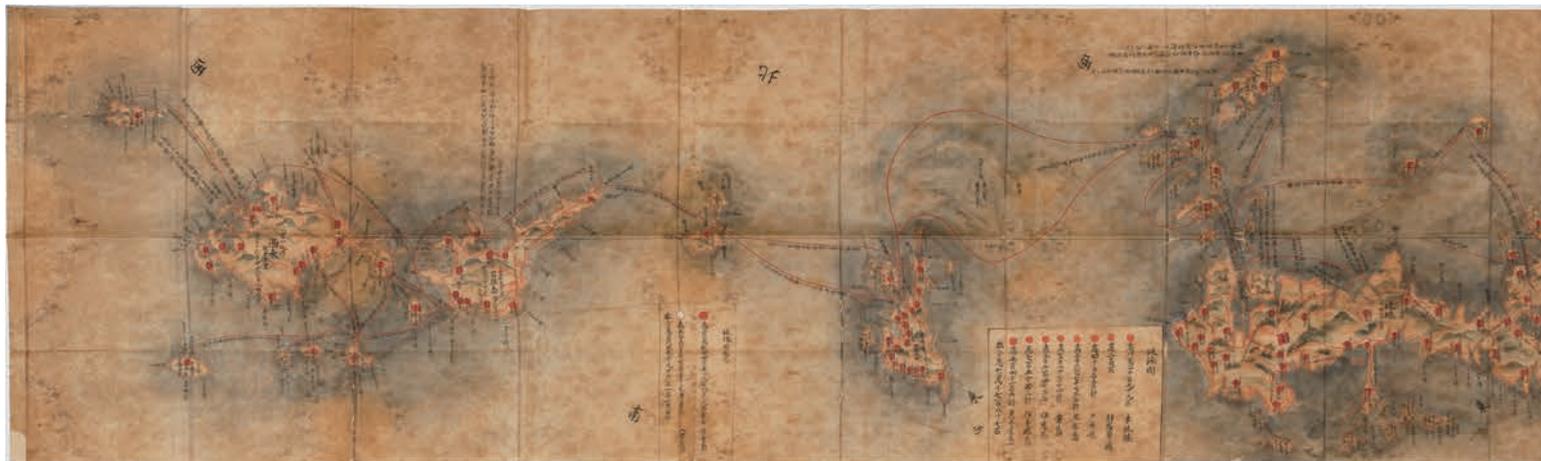


図5 都城図（都城島津邸所蔵）

後述する沖縄本島部分の修正という編集作業を想定しなければならぬ。しかも転写の精度からすると、都城図の製作時にはこの編集作業は終わっていた、すなわち「原都城図」が編集済みの絵図だったと考えるのが自然であろう。同じ「祖寛永図」から派生しながら、寛永図は沖縄本島を「悪鬼納嶋」と表記する国絵図に仕立てられていったのに対し、それとは別の論理によって一鋪の絵図になって沖縄本島を「本琉球」と表記する「原都城図」が成立し、さらに都城図に転写されたものと推測できるのである。<sup>⑦</sup>

### 三 文献史料から

かつての筆者の検討では、寛永図の記載文字から景観年代を絞り込んでいくと、一六三九年頃から一六四五年の間に求められるとした（黒嶋・安里二〇二〇）。寛永図は編集段階の下図であり、その原図や、さらにルートとな

る「祖寛永図」はそれ以前に成立していたことなるう。当時の政治状況から、そこには琉球に強い影響力を及ぼしていた薩摩藩が関与した可能性が高い。こうした観点から、以下に掲げる二つの史料は、薩摩藩による琉球絵図徴収を示すものとして注目される。

まず一六三三年八月、薩摩藩の鹿兒島家老が琉球に宛てて、次の指示を出した。

一、琉球諸嶋絵図并道のり・高付之事、付、鷹之巢見立可被申上事<sup>⑧</sup>  
 じつは当時、幕府から派遣された国廻り上使が薩摩藩領に滞在しており、この上使の派遣目的の一つに、巡検先の国絵図収集があったと考えられている（川村二〇一三）。薩摩藩家老の指示にある「道のり」（交通情報）・「高付」（石高明細）という特徴は、江戸に戻った国廻り上使が幕府に提出した国絵図の特徴と重なることから、ここで製作と薩摩藩への提出を命じられた「琉球諸嶋絵図」もまた、幕府による絵図徴収事業と関わるものであった可能性がある。

それから六年後の一六三九年七月、薩摩藩の使者として琉球に滞在していた伊東祐昌は、帰国時の復命書に相当する文書のなかで、次のように報告している。

一、琉球嶋々不残見廻申候而、絵図細ニ仕置候、前琉球より参候絵図ニ少替申候事、<sup>⑨</sup>

ここにいる「前琉球より参候絵図」とは、時期的な近さから、一六三三年に薩摩藩が製作を命じた「琉球諸嶋絵図」を指す可能性が高い。琉球に赴いて現地の「見廻」をした祐昌は、その経験から「琉球諸嶋絵図」を補正し修正版を製作したのであろう。この修正版を仮に「祐昌図」と呼びたい。

では、祐昌は「琉球諸嶋絵図」のどの部分を補正したのであろうか。これを考える材料として、祐昌の復命書と対になる、「肥後守祐昌様琉球御渡海日記」（以下、渡海日記と略記）がある。<sup>⑩</sup> 渡海日記は一六三八年一〇月に鹿兒島を出発してから翌年四月に帰国するまで、琉球下向中の祐昌の行動を一日も欠かさずに記録しており、ここから彼の「見廻」の訪問先も復元しう

図6 沖縄本島における伊東祐昌の足跡



る。祐昌は一六三八年一〇月二十七日に那覇に入港してから翌年三月一五日に運天を出港するまで、船中を除けば基本的に沖縄本島に滞在している。しかも彼は往路・復路とも、徳之島―沖縄本島の間は海路を直行して途中で下船しておらず、徳之島以北は復命書のなかで「道嶋」と呼び区別しているため、祐昌が「見廻」をした「琉球嶋々」とは、沖縄本島およびそこから視認できる周辺島嶼に限られる。

彼の沖縄本島内の訪問先のうち、主な地名を图示したものが図6である。祐昌は、薩摩藩の飯屋が置かれた那覇に拠点を置き、王府のある首里との間を頻繁に往復するだけでなく、那覇近郊の牧港・泊・豊見城・垣花・小禄などにも日常的に赴いている。時には遠出をして、読谷で漂着した南蛮人を見し（渡海日記、一六三八年一二月二日～四日条）、勝連城を見物した帰り

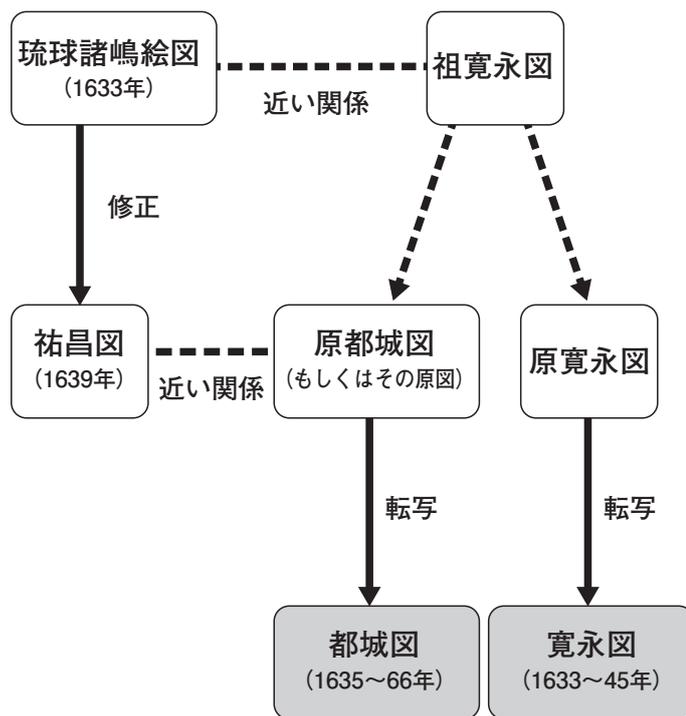
には越来・金武まで足を延ばした（一六三九年一月一日～一八日条）。帰国時には那覇から出航せず、陸路を北上して北谷・恩納を経て運天に向かい、運天で風待ちをしている間にも辺戸岬まで船で見物している（一六三九年二月一日～二五日条）。こうした祐昌の精力的な動きは、まさに「見廻」といべきもので、実際に歩き目にした知見をもとに「琉球諸嶋絵図」を修正し、あらためて「祐昌図」を製作したのであろう。

さて、ここで検討したいのが、本稿の対象とする都城図と寛永図とにおける沖縄本島部分の相違箇所である（図1および図2上）。両図の沖縄本島部分の形状は全体的には類似するものの、那覇港や崎原・小禄周辺の部分で大きく相違することから、安里氏は、都城図が「寛永図」を直接模写した場合に生じ得ない「レベルの変更がなされている」と指摘している（「黒嶋・安里二〇二二」二〇頁）。さらに詳しく寛永図の沖縄本島の形状と見比べると、他にも都城図では豊見城間切の位置が変わり、那覇港東部の豊見城付近の入り江が拡大している（図3）。これ以外の場所では、北谷の白比川河口の入り江が干潟になり、東海岸では勝連半島の先端部や越来周辺の海岸線、西海岸では恩納周辺と運天周辺の海岸線などが異なる。沖縄本島北東部の複雑な海岸線は両図で類似しているにもかかわらず、これらの箇所では顕著に相違がみられるということは、転写による歪みの蓄積に起因するというよりは、意図的な変更によるものと考えるのが自然であろう。

そして興味深いことに、これらの変更箇所は、いずれも渡海日記に記されている伊東祐昌が現地を踏破した地点と一致する。既述のように都城図には「原都城図」が存在し、その段階までに一鋪に編集され、すでに沖縄本島部分も変更されていたと考えられるのであった。祐昌の足跡と重なる状況証拠から、この「原都城図」もしくはその原図と、一六三九年に祐昌が沖縄本島部分を修正し薩摩藩に提出した「祐昌図」とは、近い関係にあったと推測することができるだろう。

さらに、「原都城図」と「祐昌図」とが近い関係にあるという推測が成り立つとき、前章で措定した「原都城図」のルートとなる「祖寛永図」と、

図7 都城図と周辺絵図の関係



「祐昌図」の原図となった「琉球諸嶋絵図」ともまた、同様に近い関係にあったことになる。以上を図示すると図7のようになる。次なる課題としてそれぞれの距離感を見極める必要があるが、とはいえ「原都城図」も「祖寛永図」も、都城図と寛永図との関係性を理解するために筆者が措定した概念であるので、これが史料上の「琉球諸嶋絵図」や「祐昌図」と同一であるか否かを論じても建設的な意義は乏しい。むしろここでは、「原都城図」は「祐昌図」と、「祖寛永図」は「琉球諸嶋絵図」と、それぞれ近い関係にあったということが推定できれば十分である。

おわりに

本稿では都城図の内容と成立事情について、ささやかな検討を試みてきた。推測に頼った部分も少なくないが、都城図の原図（「原都城図」）は、一六三九年に伊東祐昌が沖縄本島部分を修正して製作した絵図と、きわめて近い関係にあるという見通しを得た。この見通しは、同図の景観年代（一六三五～六六年の間）とも整合するものである。また、都城図と寛永図との図形的な一致から措定された「祖寛永図」も、一六三三年に薩摩藩が琉球に提出を命じた「琉球諸嶋絵図」と近い関係にあることが推測された。都城図の外題にある「琉球并諸島図」という名称は、ルーツが「琉球諸嶋絵図」にあったことのかすかな痕跡だった可能性があり、これを重視すれば本稿が措定した「祖寛永図」という名称も、あるいは「祖諸島図」と改めた方が適切であるかもしれない。

以上のように都城図は、一六三〇年代に薩摩藩が琉球から徴収した絵図をルーツとしていたと推測できる。一六四四年から製作を始める正保図に結実していく琉球周辺の地理情報が、それ以前にどのように蓄積・継承されていたのかを考える素材としても、都城図が貴重な絵図であることは確かである。

都城図の中には、まだ多くの歴史情報が眠っているはずだ。そのさらなる分析のために、新たに「都城島津邸所蔵「琉球并諸島図」デジタルアーカイブ」を構築し、「正保琉球国絵図デジタルアーカイブ」(<https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/collection/digitalgallery/ryukyu/>)のなかの「コンテント」として、二〇二三年八月より公開を開始する予定である。このアーカイブでは、都城図の高精細画像を閲覧できるだけでなく、記載文字のテキスト検索などの機能を搭載している。新たな研究基盤を活用し、都城図の分析視角がさらに多様化することを願って、擲筆したい。

註釈

(1) 都城島津邸での登録名称は「琉球諸島絵図」（請求記号：ID〇〇〇八五）であ

- るが、絵図の外題では「琉球并諸島図」とあるため、本稿ではこの名称に拠った。
- (2) この法量は、都城島津邸が二〇一八年度に行った同図の修理後のものである。
- (3) 沖縄県教育委員会編『沖縄県歴史の道調査報告書VI―国頭方東海道・他』、一九八九年、七―一四頁。この部分の執筆者である名嘉正八郎氏は、都城図と元禄の琉球国絵図について比較検討を行っている。
- (4) この他に「銅鑄琉球国全島図」(一八七四年)も、トカラ諸島から八重山諸島までの描画範囲や島の形状の類似性から、諸島図系の絵図を下敷きにした可能性が高い(黒嶋二〇二二a)。
- (5) 東京大学史料編纂所所蔵「琉球諸島図」の原本にあたる、内務省所蔵絵図は現在の所在が不明となっている。内務省所蔵の琉球関係史料は一九二三年の関東大震災で焼失しており「黒嶋二〇一六」、おそらくは本絵図の原本も運命を共にしたものと考えられる。
- (6) 正保図とともに、薩摩藩が將軍から拝領した土地の石高明細を記した郷帳が幕府に提出されている(正保郷帳)。この正保郷帳は伝来していないが、正保郷帳を手直したものとされる寛文四年(一六六四)の「琉球国郷帳」(『統々群書類従』九所収)によれば、沖縄本島は「悪鬼納嶋」と記される。なお、元禄国絵図以降、幕府―薩摩藩の公的関係における沖縄本島の表記は「沖縄島」になる。
- (7) これに関連して、以前の拙稿では、「この寛永図から派生した絵図と想定される「琉球并諸島図」(以下、諸島図)がある」と記したが(『黒嶋二〇二二b』六八頁)、これは誤りである。お詫び申し上げますとともに、当該部分を「この寛永図と共通するルーツから派生した絵図と想定される「琉球并諸島図」(以下、諸島図)がある」と訂正したい。
- (8) 寛永一〇年(一六三三)八月一〇日付け、島津久元ら連署状(『鹿児島県史料 旧記雑録後編』五一―六三八号)。
- (9) (寛永一六・一六三六年)七月二〇日付け、伊東祐昌条書写(『鹿児島県史料 旧記雑録後編』六一―四〇号、なお文書原本は宮崎県総合博物館所蔵「伊勢文書」に現存している)。
- (10) 「肥後守祐昌様琉球御渡海日記」(『木脇文書』所収)の翻刻と解説は「石井二〇一八」を参照。また、同史料を用いて伊東祐昌ら往復の航路を検討したものに、「渡辺二〇二二」がある。

#### 【参考文献】

- 石井正敏 二〇一八年「史料紹介『肥後守祐昌様琉球御渡海日記』」(『石井正敏著作集』四、勉誠出版、初出一九八六年)
- 沖縄県教育委員会編 一九九四年『琉球国絵図史料集 第三集』沖縄県教育委員会

川村博忠 二〇一三年『江戸幕府撰日本絵図の研究』古今書院

黒嶋敏 二〇一六年「影写本「旧琉球藩評定所書類」について」(『東京大学史料編纂所一般共同研究「琉球王府発給文書の基礎的研究」プロジェクト編「琉球王府発給文書の基礎的研究」東京大学史料編纂所一般共同研究「琉球王府発給文書の基礎的研究」プロジェクト」)

黒嶋敏 二〇二三年a「前近代の日琉航路覚書」『東京大学史料編纂所研究紀要』三三

黒嶋敏 二〇二三年b「正保琉球国絵図を読み解く」『琉球沖繩歴史』五(掲載予定)

黒嶋敏・安里進 二〇二〇年「寛永の琉球国絵図」について『首里城研究』二二

黒嶋敏・安里進 二〇二二年「寛永の琉球国絵図」について(補論)『首里城研究』二四

平岡昭利 二〇〇一年「琉球に関する古地図資料」『下関市立大学論集』四四(三)

横山健堂 一九一四年『薩摩と琉球』中央書院

渡辺美季 二〇二二年『琉球国図』の薩琉航路―『琉球御渡海日記』から考える―

『国立歴史民俗博物館研究報告』二二三

【付記】本稿を成すにあたり、「琉球并諸島図」の所蔵者である都城島津邸および関係者の皆様には、調査・撮影ならびに図版掲載・デジタルアーカイブ公開などにご理解をいただき、多岐に渡るご高配を賜りました。あらためて御礼申し上げます。また、都城図の写真整形では、東京大学史料編纂所史料保存技術室の高山さやか氏にご担当いただきました。

なお、本稿は、以下の各種研究プロジェクトの研究成果です。JSPS科研費(一八H〇〇六九八・二一K一八〇一四)、鹿島学術振興財団研究助成「正保琉球国絵図の研究資源化とデジタルアーカイブの構築」、JFE21世紀財団アジア歴史研究助成「前近代の那覇港における航路と聖地」、東京大学史料編纂所画像史料解析センター「琉球諸島図」プロジェクト(いずれも研究代表者・黒嶋敏)。